

長野県千曲市

屋代遺跡群 荒井遺跡7

－ 長野電子工業(株)工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

2012

千曲市教育委員会



千曲市の位置

例 言

1 本書は、長野電子工業㈱ 代表取締役社長 市川和成と、千曲市長 近藤清一郎との、埋蔵文化財発掘調査業務委託契約に基づき実施した、平成22年度 長野電子工業㈱工場建設に伴う屋代遺跡 群荒井遺跡の発掘調査報告書である。

2 調査報告書作成及び刊行を含めた整理調査は、平成23年度に実施した。

3 調査は、千曲市教育委員会生涯学習文化課が主体となり、文化財係が担当した。

4 本書の執筆・編集は寺島が行った。

5 本書掲載の遺構及び遺物の縮尺については下記のとおりである。

竪穴住居跡 = 1 : 60 掘立柱建物跡 = 1 : 60 土層断面図 = 1 : 20 · 1 : 40

土器実測図 = 1 : 4 · 1 : 2 土器拓本図 = 1 : 3 石器 = 1 : 1 · 1 : 3

玉類 = 1 : 1

6 本書掲載の竪穴住居遺構図において、床面での焼土及び炭化物の散布範囲については、網掛けにより表現した。

7 本文中の遺物実測図の表現方法は下記のとおりである。

土 師 器 断 面 =  黒色処理 = 

須 恵 器 断 面 = 

軟質須恵器 断 面 = 

陶 器 断 面 = 

8 本文中の図版の座標値及び方位は、平面直角座標系第Ⅱ系で示している。

9 調査によって出土した遺物のほか、実測図及び写真等発掘調査に関するすべての資料は、千曲市教育委員会で保管している。

目 次

例言

目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査日誌	3
第2章 遺跡の環境	4
第3章 遺構と遺物	6
第1節 調査の方法	6
第2節 基本層序	7
第3節 竪穴住居跡	9
第4節 掘立柱建物跡	20
第5節 溝跡	22
第6節 土坑・ピット	25
第4章 まとめ	35

写真図版

報告書抄録

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

平成22年9月、長野電子工業㈱より千曲市大字屋代字荒井地籍において工場の建設計画があるとの連絡があった。

事業予定地は屋代遺跡群荒井遺跡の範囲内にあたり、平成元年度に実施した松代電子㈱工場建設に伴う発掘調査地点に隣接する場所となる。この調査では、弥生時代から平安時代の堅穴住居跡をはじめとする多くの遺構・遺物が検出されていることから、今回の工場建設地点においても同様に多くの遺構が検出されるものとみられた。

当該地は地表下60cm～80cmで埋蔵文化財の包蔵が確認されているため、建設工事に伴い遺跡が破壊される恐れがあるとして、事前に発掘調査が必要な旨を事業者側に伝え、正式な設計図面が出来上がった段階で当該事業に係る埋蔵文化財保護協議を実施することとした。

平成22年12月6日、文化財保護法第93条に基づく届出書が提出され、平成22年12月13日に事業主体者、設計業者、工事請負業者と市教育委員会による保護協議を実施した。

事業面積約4,900㎡に対して、工場建設に伴う掘削が及ぶ範囲は2,100㎡であり、平成元年度におこなった発掘調査箇所も工場建設予定地に含まれていたため、平成元年度調査区1,200㎡を除いた約900㎡について、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

この保護協議の際、発掘調査が年明けに予定されたため、当該年度内での整理調査の完了が困難となることから、調査報告書作成を含めた整理調査は平成23年度に実施することでご理解いただいた。

平成23年1月11日に長野電子工業㈱代表取締役社長 市川和成と千曲市長 近藤清一郎との間で発掘調査業務委託契約を締結した。

発掘調査は平成23年1月18日から開始し、2月28日に現場における作業を終了した。実動29日間である。

発掘調査報告書作成を含めた整理調査は、平成23年5月2日に整理調査業務委託契約を締結し、同日より整理作業を開始。平成24年2月29日の調査報告書刊行をもって、当該事業に係るすべての業務を終了した。

1 調査遺跡名	屋代遺跡群 荒井遺跡（千曲市遺跡台帳 No. 31-5 調査記号 ARI7）
2 所在地	千曲市大字屋代字荒井1200番地 ほか
3 土地所有者	長野電子工業㈱ 代表取締役社長 市川和成
4 調査原因	長野電子工業㈱工場建設
5 事業主体者	長野電子工業㈱ 代表取締役社長 市川和成
6 調査の内容	発掘調査 調査面積 950㎡
7 調査期間	発掘調査 平成23年1月18日～平成23年2月28日 整理調査 平成23年5月2日～平成24年2月29日
8 調査費用	発掘調査 2,250,000円（全額事業者負担） 整理調査 1,220,000円（全額事業者負担）

- 9 調査受託者 千曲市長 近藤清一郎
 調査体制 千曲市教育委員会 教育長 安西嗣宜（～平成23年12月3日）
 吉川弘義（平成23年12月5日～）
 教育部長 高松雄一（平成22年度）
 小池洋一（平成23年度）
 経理総監 小泉義和（平成22年度）
 武田清志（平成23年度）
 文化財部長 矢島宏雄
 文化財係 翠川泰弘
 寺島孝典（調査担当者）
 久保紀明（平成23年度）
- 調査参加者 大畷美代子・高野貞子・高野幸男・田中富子・戸谷今朝登・中村文恵
 間嶋今朝雄・米沢須美子
- 10 種別・時期 集落跡 弥生時代～中世
- 11 検出遺構 弥生時代 竪穴住居跡2棟・溝跡3基
 奈良時代 竪穴住居跡3棟・掘立柱建物跡2棟
 平安時代 竪穴住居跡13棟・掘立柱建物跡1棟・溝跡3基・土坑3基
 中世 溝跡6基・土坑39基 時期不明 ビット201基
- 12 出土遺物 土器・陶器・石器・玉類 弥生時代～中世

遺物整理コンテナ20箱



第1図 調査地位位置図（1：20,000）

第2節 調査日誌

【平成22年】

- 1月18日(火) 除雪作業。発掘機材・プレハブ・トイレ撤入。バックホーによる表土掘削(～21日)。
- 1月19日(水) 遺構検出作業。
- 1月20日(木) 1号住居跡調査。1号溝跡調査。
- 1月21日(金) 遺構検出作業。
- 1月24日(月) 遺構検出作業。土坑・ピット、堅穴住居跡、溝跡など多くの遺構が検出される。
- 1月25日(火) 1号住居跡調査。
- 1月26日(水) 1号住居跡写真撮影。1号溝跡調査。
- 1月27日(木) 1号溝跡(調査区東側部分)調査。
- 1月28日(金) 1号溝跡断面写真撮影。ピット群調査(～2月2日)。
- 1月31日(月) 1号住居跡平面図。2～3号溝跡調査。
- 2月1日(火) 土坑、2号住居跡調査。ピット群及び土坑平面図(～3日)。
- 2月2日(水) 2号住居跡写真。3号溝跡、4号住居跡調査。
- 2月3日(木) 3号溝跡・4～6号住居跡調査。
- 2月4日(金) 4～6号住居跡調査。
- 2月7日(月) 7号住居跡調査。4～6号住居跡写真撮影。
- 2月8日(火) 7～8号住居跡調査。
- 2月9日(水) 7～8号住居跡写真撮影、平面図。
- 2月10日(木) 基準点測量。1号溝跡写真撮影。
- 2月14日(月) バックホーによる下層面への掘削。遺構検出作業。
- 2月15日(火) 9～11号住居跡調査、写真撮影。
- 2月16日(水) 6～10号溝跡調査。10号住居跡写真撮影。
- 2月17日(木) 12号住居跡、10号溝跡調査。
- 2月18日(金) 12～14号住居跡調査。
- 2月21日(月) 14～16号住居跡調査。
- 2月22日(火) 4～10号溝跡調査。住居跡写真撮影。
- 2月23日(水) 土坑群調査。平面図。
- 2月24日(木) 17～19号住居跡調査。11号溝跡調査。
- 2月25日(金) 1～2号掘立柱建物跡調査。全体写真撮影。平面図。プレハブ・トイレ撤収。
- 2月28日(月) 発掘機材撤収。本日もって発掘調査終了。



バックホーによる表土掘削



遺構検出作業



基準点測量



雪中での調査風景

第2章 遺跡の環境

千曲川の氾濫によって形成された自然堤防上に立地する屋代遺跡群には多くの遺跡が濃密に分布し、開発行為に伴ってこれまでに数多くの発掘調査が実施されている。また、自然堤防により塞閉された山際までの低地一帯は後背湿地となり、平安時代の条里制埋没水田跡が検出される更埴条里水田址となる。このように、自然が作り出した環境を人々は上手に利用し、時には開拓し、長い間生活の場として利用し続けている状況が過去の発掘調査などから垣間見ることができる。

屋代遺跡群内では、昭和32年に東京教育大学（現在の筑波大学）がおこなった城ノ内遺跡の学術発掘調査を皮切りに、これまで数々の発掘調査が実施されてきており、古墳時代や平安時代を中心とした集落跡を検出している。

平成4年度からは、上信越自動車道建設工事に伴う発掘調査が長野県埋蔵文化財センターにより実施されている。平成5年度には地表下約4mから大規模な縄文時代中期集落が検出されているほか、縄文時代前期から晩期に至る集落跡の存在も確認されている。平成6年度には国府木簡や群府木簡をはじめとする多量の遺物が出土し、大型の掘立柱建物跡の検出などから、周辺に古代官衙が存在している可能性が極めて高い場所と考えられている。また、平成5年度から実施された北陸新幹線建設工事に伴う発掘調査でも、古墳時代から平安時代にかけての集落跡が調査されている。

当市教育委員会でも、城ノ内遺跡、荒井遺跡、大境遺跡、町浦遺跡、大宮遺跡、馬口遺跡で集落遺跡が、大塚遺跡、北中原遺跡、地之目遺跡では水田跡や畠跡などの農耕に関連する遺跡が数多く調査されてきており、屋代遺跡群内の古環境も徐々に解明されてきている。

今回の調査地点は、北緯36度32分54秒、東経138度08分08秒付近、海拔は現地表面で357mを測り、当該地の北西を流れる一丁田川を境に千曲川の旧河道域となるため、屋代遺跡群の西端付近に位置することになる。

荒井遺跡ではこれまでに6地点の調査が実施されており、弥生時代から平安時代の集落のほか、中居館址に関連するとみられる遺構も検出されている。

弥生時代は、集落規模はそれほど大きくはないものの、隣接する城ノ内遺跡や松ヶ崎遺跡でも弥生時代中期から後期の遺構が確認でき、特に弥生時代中期初頭から中期前半に位置付く資料が比較的多く出土する。平成2年度の調査では断面がV字を呈する幅3mの溝跡が検出され、その規模や形状から弥生時代中期後半集落の囲郭溝となる可能性が高く、環濠集落を形成していたことが示唆される。弥生時代後期は生仁遺跡などで比較的規模の大きな集落が確認されている。

古墳時代では、灰塚遺跡で4世紀代の集落が調査されているほか、城ノ内遺跡や大境遺跡、町浦遺跡などで主に5世紀～6世紀にかけての集落が検出される。荒井遺跡では、平成6年度の調査で3世紀末～4世紀初頭とみられる方形周溝墓のほか、古墳時代としては稀な5世紀の土器棺墓が確認され、古墳時代の墓域が展開していることが予想されている。松ヶ崎遺跡も含め荒井遺跡周辺に住居跡など居住に関する遺構はほとんど確認できなくなるため、集落は極限られた地域に偏在する傾向が今のところみられる。

平安時代は大規模な集落を造営することが判明しており、主に8世紀～9世紀にかけての集落が展開し、場所によって密度の差はあるものの屋代遺跡群内全域で検出される。特に町浦遺跡や大境遺跡

周辺に官衙跡の存在が推定されており、遺構の密集度も極めて高い地域となる。

中世では大規模な溝跡が検出されている。幅は4mから、大きいもので10m前後、深さは2m～4mを測り、断面はU字形や逆台形を呈する。ほぼ直角に屈曲する箇所も確認されており、その規模や形状から居館址の堀跡を想定している。

一辺が100m近くを測るものも存在し、古地図では荒井地籍や城ノ内地籍などに居館址の痕跡と考えられる正方形の地割がいくつも確認できる。ただ、居住施設となる竪穴遺構や掘立柱建物跡のほか、橋などの防護施設の検出例はあまりなく不鮮明な部分が多いが、城ノ内遺跡では高さ40cmほどの土塁状の盛土が堀の脇に築かれているのが断面観察で確認されている。

溝跡のほかには、直径1m前後を測る円形土坑が数多く確認できる。内部からは内耳鍋やカワラケ、陶磁器のほか、石臼や五輪塔などの石製品が出土することがあるが、多くは出土物のない遺構である。覆土は黄褐色の粘質土と黒褐色の砂質土が混在するものや、暗青灰色の粗砂が充填するものなど内容に差異が生じている。検出される遺構の重複関係では最も新しい遺構となり、円柱状に深さ2m以上を測るものが大半であることから、中世の井戸跡を想定している。



第2図 周辺の遺跡分布 (1:5,000)

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の方法

1 調査範囲の確定

今回の調査地点は、平成元年度に実施した松代電子工業機工場建設に伴う発掘調査（以下、元年度調査とする。）の隣接地にあたるため、まず設計図面上において元年度調査地点の特定をおこない、調査範囲を明確にすることとした。

元年度調査箇所は今回の工場建設範囲にほぼ内包されるもので、西側に2m～4mの拡張範囲があり、南側へは約24m広がるものであった。南側拡張部は西側へ約13m張り出し、東側は逆に約11m入り込む形となる。北側については、元年度調査の際、調査区北側約10mが土取りによるとみられる掘削で遺跡が破壊された状態であったと報告されていることから、これを確認するための試掘坑を2箇所設定し調査した。

試掘調査では地表下約1m50cmを掘削したが、埋め立てに用いられたとみられる礫が充満していた。当該地区では遺物包含層が地表下60～80cmで確認できることから、元年度調査同様、北側一帯は既に遺跡が破壊されている状態と判断し、この地点は調査対象から除外した。

これにより、調査面積は元年度調査区の南側一帯を中心とした900㎡余りとなった。

2 遺構の検出

前章でも述べたように、荒井遺跡では過去6地点の発掘調査が実施されており、加えて城ノ内遺跡や松ヶ崎遺跡など近隣の調査成果も踏まえ、検出される遺構の性格並びに遺構確認面（地山）までの深さなどの情報が多くあったため、調査ではこれら成果に基づいて進めることができた。

当該地では地表下1m前後で黄褐色を呈するシルト質土が確認でき、その上部に各時代の遺物包含層が堆積する。層序の詳細については後節で説明するが、遺構の検出作業はこの黄褐色シルト質土を目安として進めた。

各遺構は、場所によって複雑に重複し、遺構の新旧関係が不明確な場合もある。時代の異なる遺構の重複については、遺構内覆土の内容や出土遺物によって概ね判断できるものの、同時代で、時期の近接した竪穴住居跡について、平面観察で新旧関係が明確にできない場合は、重複箇所には1本ないし2本のトレンチを設定し、断面観察や床面の破壊状況等を確認して新旧関係を確定させた。

掘立柱建物跡については、遺構検出作業において柱穴遺構の形態と覆土内容を考慮し、同一内容の土坑が一定の間隔により配される遺構を掘立柱建物跡とした。

3 遺構番号の付与

これまでの周辺の調査成果により、当該遺跡は弥生時代から中世に至る複合遺跡であることが明らかとなっており、竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑、溝跡など様々な遺構が検出されている。

竪穴住居跡は、弥生時代では円形もしくは楕円形を、古墳時代や平安時代では方形を呈し、一辺が4m～6mのものが大半を占める。平安時代の竪穴住居跡には普遍的にカマドが設けられ、屋外へ煙を排出するための煙道が付設される。特に平安時代の竪穴住居跡は規模や向きに一定の規範が存在し、竪穴住居跡としての特定にはこれらの特徴を考慮しながら、竪穴住居跡を想定する遺構のすべてに番号を付した。

土坑については、竪穴状の遺構、円形土坑は直径が概ね50cm以上の遺構、小規模であっても遺物の出土する遺構に番号を付した。なお、出土遺物のない小規模土坑はピットとして扱い、番号は付していない。溝状遺構にはすべて番号を付した。

4 遺構の記録

検出された遺構については、平面図及び断面図、写真撮影により記録した。

平面図は、調査区内に任意の測量点2点を設定し、この2点を基準点として1/20で作成した。なお、基準点測量については業者に委託し、座標及び標高を求めている。

各遺構の土層断面図については、必要に応じて作図した。

写真は白黒とカラーリバーサルそれぞれ35mmで撮影し、必要に応じてデジタルカメラを用いた。

5 整理調査

出土した遺物の整理については、遺構ごとに取り上げた日付、出土位置等を台帳に記し、それぞれ洗浄・注記・接合・復元の順で作業を実施した。

図面整理にあたっては、現場において作成した1/20の平面図を基に、個別の遺構図を統一した縮尺率により作成した。

遺物実測及び洗浄は原則原寸でおこなったが、石鏃や玉などの遺物については、それぞれの遺物の特徴を詳細に図化するため、拡大をして実測・洗浄をおこなっている。

第2節 基本層序

調査区の北側と南側とで堆積状況に若干の差異はあるものの、第4図に示した土層断面図が基本的な層序となる。

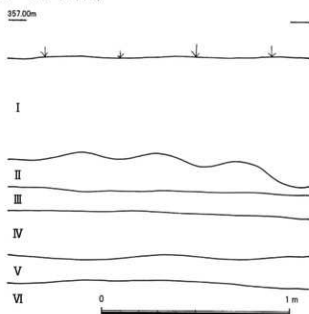
第I層は耕作土で黒色のしまりのない土となる。厚さは場所によって異なるが、概ね50cm程度である。なお、調査区北側の松代電子跡地では工場建設の際の造成礫が40cmほど盛られる。

第II層は黄褐色砂質土で、調査区域内の北西一帯に厚さ10cm～20cmの堆積が認められるが全域におよぶものではない。

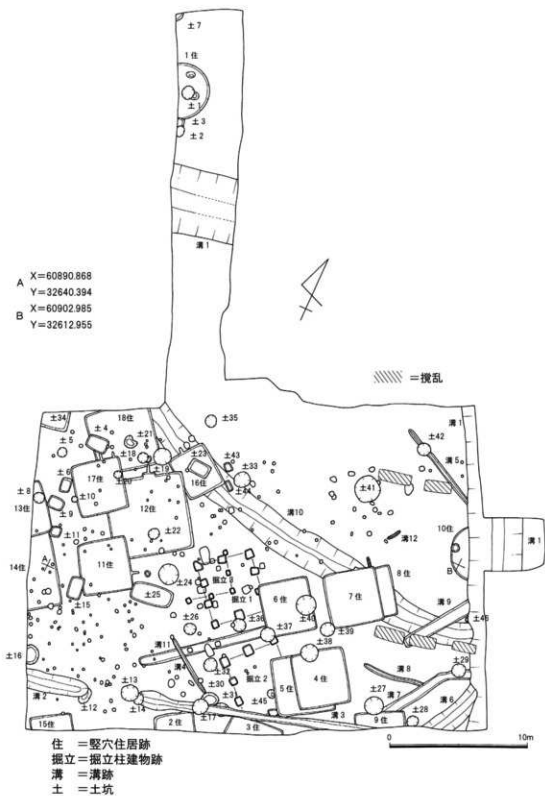
第III層は黒灰褐色、第IV層は暗褐色のそれぞれシルト質土で、双方とも平安時代の遺物が混入する。

第V層は暗灰褐色砂質土を呈し、弥生時代中期の遺物が混入するが、第II層同様調査区全域には認められない。

第VI層は黄褐色のシルト質土を呈する遺構確認面とした基盤層で、地表下約120cmを測る。



第3図 土層断面図 (1:20)



第4図 全体図 (1:250)

第3節 竪穴住居跡

1号住居跡

時期：弥生時代中期後半 規模：4.2m 平面形：円形
 主軸方向：不明 覆土：明灰褐色シルト 床面：堅緻
 炉：未検出 柱穴：2基

調査状況：調査区北側で検出された住居跡で、平成元年度に調査された4号住居址と同一の遺構である。

半分以上が調査区域外にあるため判然としないが、円形を呈する住居跡を想定する。また、調査範囲内においても、ほとんどが既に調査された部分で、今回新たに調査できた箇所は僅かとなる。

調査区壁付近が住居の中央で、床面は非常に堅緻となる。僅かに炭化物の散布が見られるため、この付近に炬があるものと思われるが範囲内では未検出である。

柱穴は2基確認でき、その位置から4本の方形配列をとるものと考えられる。

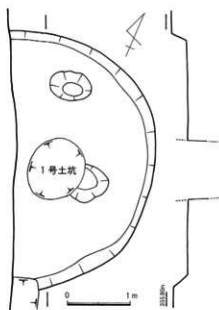
過去に調査されていた部分が大半であったため、遺物の出土は極めて少ない。壺（1）と壺（2・3）が図化できた。

1は壺の口縁部で、端部は波状口縁とした後、縄文を施文する。頸部に8本単位の櫛描波状文、胴部には櫛描羽状文がそれぞれ施文されている。

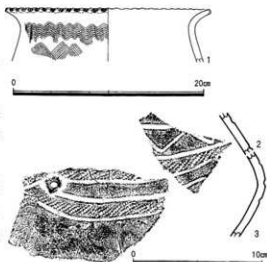
2・3は壺の胴部破片で、同一個体となる。沈線による横帯文区画と過半部は波状沈線が施文される。

第7図に平成元年度調査の際に出土した4号住居址の遺物を参考資料として提示した。

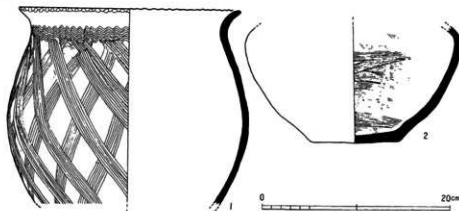
壺と甕が1点ずつ出土している。



第5図 1号住居跡 (1:60)



第6図 1号住居跡出土遺物 (1=1:4 2・3=1:3)



第7図 平成元年度調査 4号住居址出土遺物 (1:4) 参考資料

2号住居跡

時期：平安時代（9世紀後半） 規模：-×3.0m

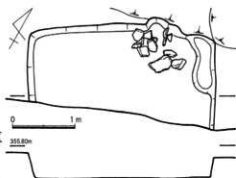
平面形：方形 主軸方向：N-31°-W

覆土：黄褐色砂質はか 床面：堅緻

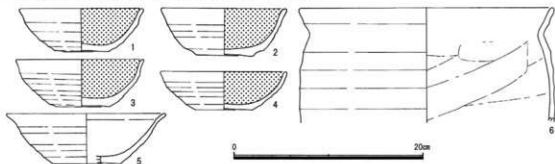
カマド：北西壁右寄りに石組 柱穴：未検出

調査状況：3号溝跡に一部を破壊され、半分ほどが調査区域外となる。仁和洪水砂を覆土にもつ住居跡である。

土師器環（1～5）と甕（6）が出土している。1～4は内面が黒色処理される。5の内面はミガキのみである。



第8図 2号住居跡（1：60）



第9図 2号住居跡出土遺物（1：4）

3号住居跡

時期：平安時代（9世紀前半） 規模：4.0m

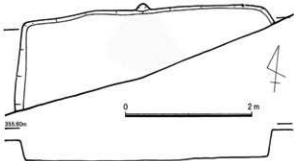
平面形：方形 主軸方向：N-16°-W

覆土：黄褐色砂質はか 床面：軟弱

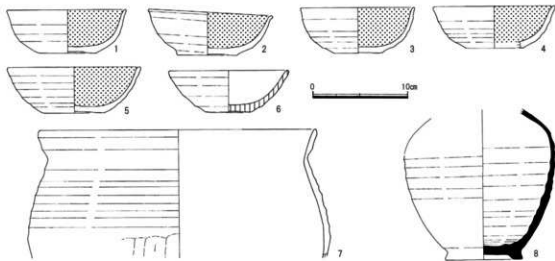
カマド：北壁中央付近 柱穴：未検出

調査状況：3号溝跡に一部を破壊され、半分以上が調査区域外となる。

土師器環（1～5）と軟質須恵器環（6）、土師器甕（7）、須恵器壺（8）が出土している。



第10図 3号住居跡（1：60）



第11図 3号住居跡出土遺物（1：4）

4号住居跡

時期：平安時代（9世紀前半）

規模：4.0m×4.2m

平面形：方形

主軸方向：N-56°-E

覆土：暗褐色シルト

床面：堅緻

カマド：北東壁中央付近

柱穴：未検出

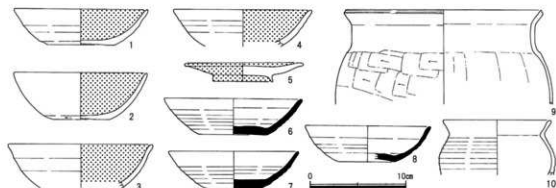
調査状況：5号住居跡と重複関係にある。カマドは北東壁の中央付近に構築されていたものと思われるが、破壊を受けており、周辺には焼土と炭化物が広く散布していた。

覆土は大きく2層に分けることができ、第12図1層は暗褐色シルト質土、2層は褐色のやや

粘質の強いシルト質土となる。3層は炭化物の堆積層である。

出土遺物には土師器杯（1～4）、土師器皿（5）、須恵器杯（6～8）、土師器甕（9・10）がある。1～4は内面が黒色処理され、1と2に底部は手持ちヘラケズリとなる。5は内外面すべてが黒色処理されている。須恵器の杯はロクロナデによる器面の凹凸が著しく、底部はすべて糸きりとなる。

9は外面をヘラケズリ、内面を板ナデにより成形した武蔵甕である。



第13図 4号住居跡出土遺物（1：4）

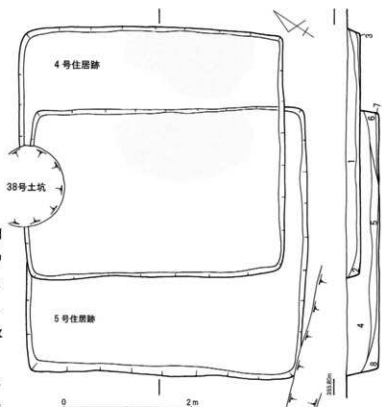
5号住居跡

時期：平安時代（8世紀末～9世紀初頭） 規模：4.2m×4.3m 平面形：方形

主軸方向：N-59°-E 覆土：暗褐色シルト 床面：軟弱（一部堅緻）

カマド：北東壁中央付近 柱穴：未検出

調査状況：4号住居跡と重複関係にあり破壊を受けているが、4号住居跡より深く構築されていたため全体を検出することができた。

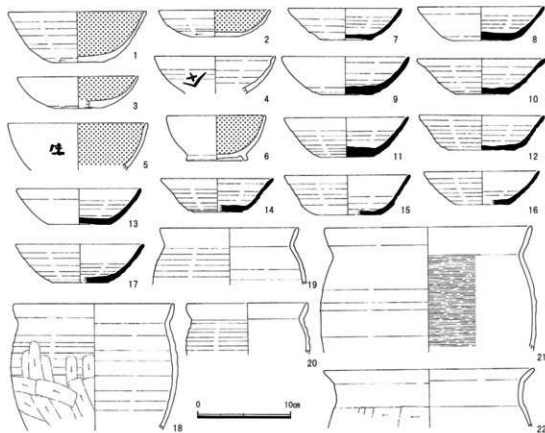


第12図 4号・5号住居跡（1：60）

北東中央部分にカマドが構築されていたと見られ、焼土や炭化物が広範囲に散布していた。

第12図4層は暗褐色のシルト質土で1層よりやや暗い。5層は炭化物の多く混入する褐色シルト質土。6層は黒褐色のシルト質土で、7層は炭化物と焼土の混合層となる。

出土遺物には土師器環(1~5)、土師器碗(6)、須恵器環(7~17)、土師器甕(18~22)がある。土師器環は4以外内面が黒色処理される。4には「今」、5には「庄」の墨書が見られる。



第14図 5号住居跡出土遺物(1:4)

6号住居跡

時期：平安時代(9世紀前半)

規模：4.0m×3.7m 平面形：方形

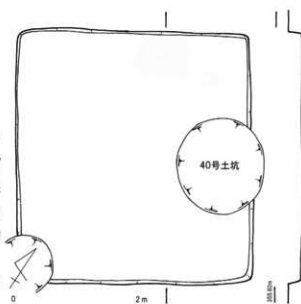
主軸方向：N-35°-W

覆土：暗褐色シルト 床面：堅緻

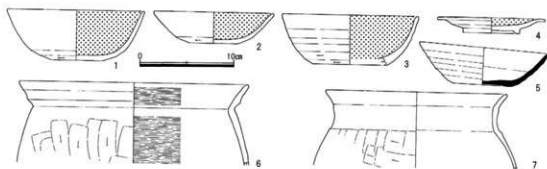
カマド：北西壁やや右寄り 柱穴：未検出

調査状況：1号掘立柱建物跡、11号溝跡、37号、40号土坑と重複関係にある。北西壁中央からやや右寄りの床面に焼土と炭化物の散布範囲が認められたため、この位置にカマドが構築されていたものと想定する。

出土遺物には土師器環(1~3)、土師器皿(4)、須恵器環(5)、土師器甕(6・7)がある。土師器の環と皿は内面が黒色処理される。



第15図 6号住居跡(1:60)



第16図 6号住居跡出土遺物 (1:4)

7号住居跡

時期：平安時代 (9世紀前半)

規模：4.1m×3.9m

平面形：方形

主軸方向：N-36°-W

覆土：暗褐色シルト

床面：堅緻

カマド：北西壁やや右寄り

8号住居跡

時期：平安時代 (8世紀末～9世紀初頭)

規模：3.7m×-

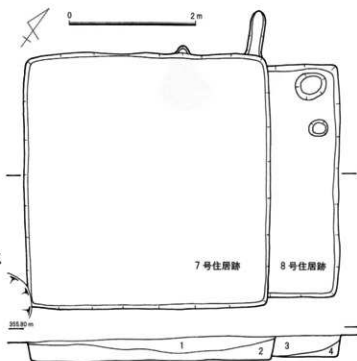
平面形：方形

主軸方向：N-36°-W

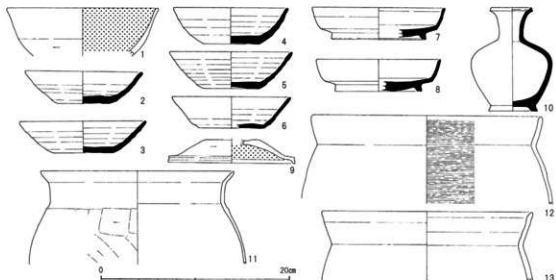
覆土：暗褐色シルト

床面：軟弱

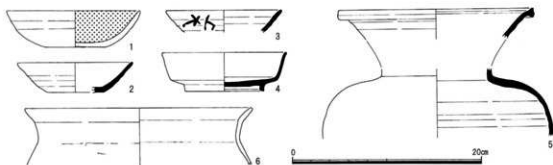
カマド：北西壁やや右寄り



第17図 7号・8号住居跡 (1:60)



第18図 7号住居跡出土遺物 (1:4)



第19図 8号住居跡出土遺物 (1:4)

9号住居跡

時期：平安時代（9世紀前半）

規模：-×3.7m 平面形：方形

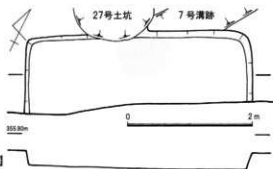
主軸方向：N-27°-W

覆土：暗褐色シルト 床面：軟弱

カマド：北西壁中央付近 柱穴：未検出

調査状況：3号溝跡、7号溝跡、27号土坑と重複関係にある。27号土坑との重複部分に煙道が僅かに確認され、焼土及び炭化物もこの付近を中心に散布が認められるため、この位置にカマドが構築されていたものと判断する。

出土遺物は少なく、須恵器環(1)と土師器甕(2)が図化できたのみである。



第20図 9号住居跡 (1:60)



第21図 9号住居跡出土遺物 (1:4)

10号住居跡

時期：弥生時代中期後半

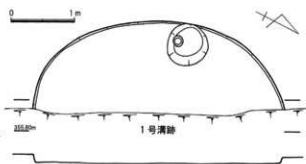
規模：4m前後 平面形：円形

主軸方向：不明 覆土：明灰褐色シルト

床面：堅緻 炉：未検出 柱穴：1基

調査状況：1号溝跡と重複関係にあり、半分以上を1号溝跡に破壊される。西側に柱痕を伴う柱穴が1基確認できている。

出土遺物は壺(1・2)と甕(3~6)がある。



第22図 10号住居跡 (1:60)



第23図 10号住居跡出土遺物 (1:3)

11号住居跡

時期：平安時代（9世紀前半）

規模：3.7m×3.9m

平面形：方形

主軸方向：N-58°-E

覆土：暗褐色シルト

床面：堅緻

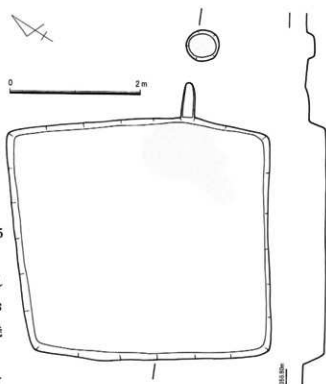
カマド：北東壁右寄り

柱穴：未検出

調査状況：12号住居跡と15号土坑及び25号土坑と重複関係にある。

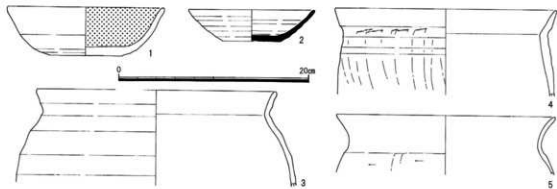
北東壁に煙道と、これに伴うと見られる炭化物の充満した土坑が確認されており、床面においてもこの付近を中心に焼土や炭化物が広範囲に散布している。

床面はカマド付近から住居中央にかけて非常に堅緻である。



第24図 11号住居跡（1：60）

遺構は比較的良好に検出されたものの遺物の出土は少なく、土師器坏（1）、須恵器坏（2）土師器甕（3～5）が図化できたにすぎない。1は内面が黒色処理され、底面はヘラケズリがされる。4・5はいずれも胴部外面にヘラケズリがされ、5は武藏甕となる。



第25図 11号住居跡出土遺物（1：4）

12号住居跡

時期：平安時代（8世紀末～9世紀初頭） 規模：5.9m×5.9m 平面形：方形

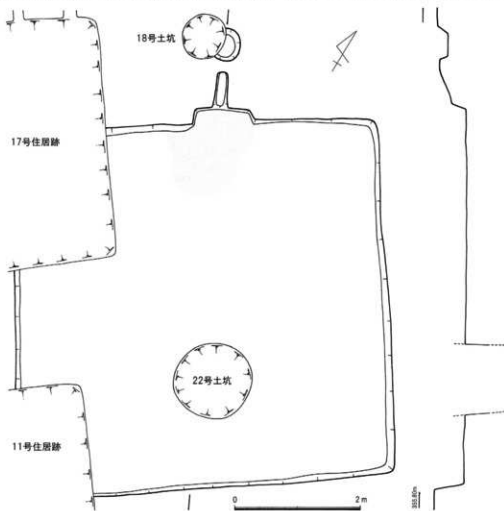
主軸方向：N-31°-W 覆土：暗褐色シルト 床面：堅緻 カマド：北西壁中央付近

柱穴：未検出

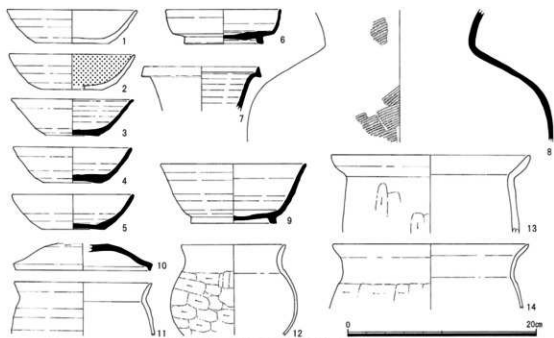
調査状況：11号住居跡及び16号～18号住居跡、22号土坑と重複関係にある。今回検出された住居跡の中で最も大きいもので、カマドは壁から張り出す構造となる。床面は住居中央付近で非常に堅緻であるが、周辺に行くにしたがって軟弱となって行く。

出土遺物には土師器坏（1・2）、須恵器坏（3～6）、須恵器壺（7・8）、須恵器碗（9）、須恵器甕（10）、土師器甕（11～14）などがある。1は内面がミガキのみ、2は黒色処理され、いずれも

底部は手持ちによるヘラケズリがされる。12は胴部にヘラケズリがされる小型の武蔵甕となる。



第26図 12号住居跡 (1 : 60)



第27図 12号住居跡出土遺物 (1 : 4)

13号住居跡

時期：平安時代（9世紀前半?）

規模：3.9m×－ 平面形：方形

主軸方向：N-50°-E 覆土：暗褐色シルト

床面：堅緻 カマド：北東壁中央付近

柱穴：未検出

調査状況：14号住居跡及び8号土坑と重複関係にある。

遺構確認面から床面までの深さが非常に浅かったため遺物の出土は少なく、時期を特定できる土器に恵まれなかったが、住居内覆土の状況と、僅かに出土した土器の様相などから、9世紀前半の住居跡であると想定する。

図化できる土器はなかった。

14号住居跡

時期：奈良時代（8世紀後半）

規模：－×5.0m 平面形：方形

主軸方向：N-35°-W 覆土：黒灰褐色シルト

床面：軟弱 カマド：未検出 柱穴：未検出

調査状況：13号住居跡に一部を破壊されている。カマドは未検出であるが、該期住居のカマドは北西壁もしくは北東壁に構築される事例が多いことから、当該遺構については北西壁に構築されているものと想定する。

出土遺物は少なく、須恵器の坏（1）と蓋（2）が図化できたのみである。

15号住居跡

時期：平安時代（9世紀前半）

規模：3.1m×－ 平面形：方形

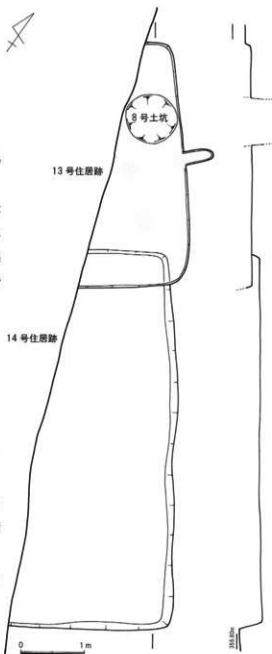
主軸方向：N-60°-E 覆土：暗灰褐色シルト

床面：軟弱 カマド：未検出

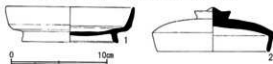
柱穴：未検出

調査状況：調査区の南西隅で検出された住居で、ほとんどが調査区域外となる。

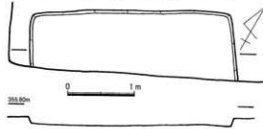
出土遺物は少なく、土師器坏（1・2）須恵器壺（3）が図化できたのみである。



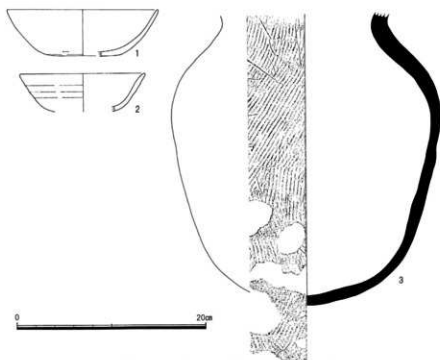
第28図 13号・14号住居跡（1：60）



第29図 14号住居跡出土遺物（1：4）



第30図 15号住居跡（1：60）



第31図 15号住居跡出土遺物 (1 : 4)

16号住居跡

時期：奈良時代（8世紀後半）

規模：3.5m×3.0m 平面形：方形

主軸方向：N-51°-W

覆土：黒灰褐色シルト

床面：軟弱 カマド：北西壁中央付近

柱穴：未検出

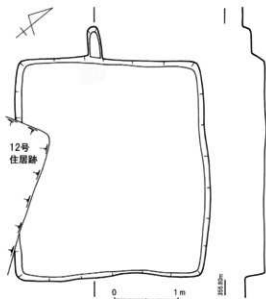
調査状況：12号住居跡、10号溝跡、23号土坑と重複関係にある。

カマドは北西壁中央付近から突出した煙道が検出され、床面においても焼土の広がり確認できたため、この位置に構築されていたものと思われる。

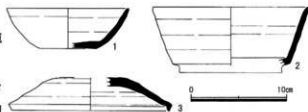
床面は比較的軟弱で、一部に凹凸が認められている。

出土遺物は少なく、須恵器の坏（1）、碗（2）、蓋（3）が図化できたのみである。

1の底部は糸きりであるが、図化できなかったものの中に回転ヘラ切り、あるいは切断後ヘラによるケズリ調整をおこなっている個体も見受けられる。



第32図 16号住居跡 (1 : 60)



第33図 16号住居跡出土遺物 (1 : 4)

17号住居跡

時期：平安時代（9世紀前半）

規模：4.0m×3.7m

平面形：方形

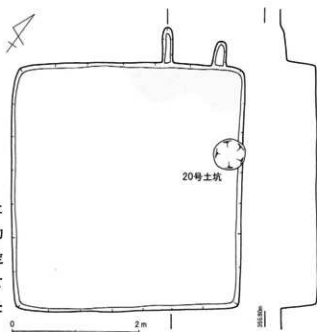
主軸方向：N-38°-W

覆土：暗褐色シルト

床面：堅絨

カマド：北西壁右寄りに2基

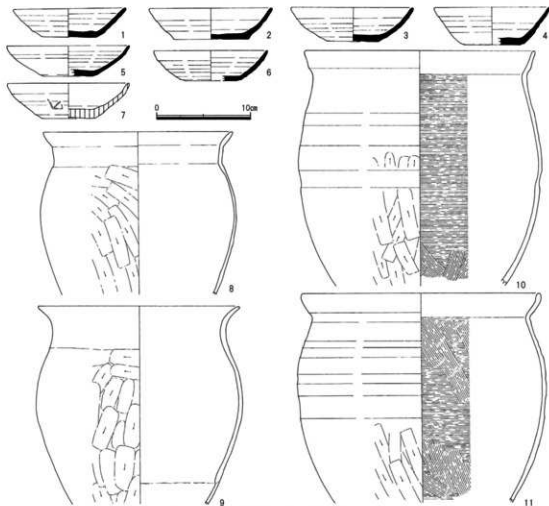
調査状況：遺構の検出過程で、北西壁に煙道が2箇所確認されたことから、当初2棟の住居跡の重複しているものと想定して調査を進めたが、この地点においての重複は認められず、作り替えを含めた2箇所のカマドを持つ住居とした。



第34図 17号住居跡（1：60）

出土遺物は須恵器環（1～6）、軟質

須恵器環（7）、土師器甕（8～11）がある。7には、焼成後に書かれた線刻がある。



第35図 17号住居跡出土遺物（1：4）

18号住居跡

時期：奈良時代（8世紀後半）

規模：4.7m×4.7m

平面形：方形

主軸方向：N-38°-W

覆土：黒灰褐色シルト

床面：軟弱

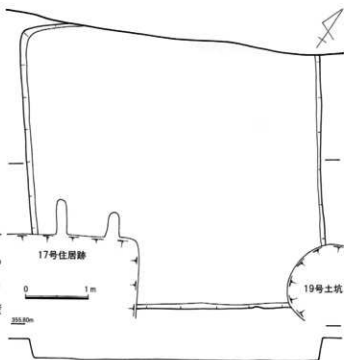
カマド：未検出

柱穴：未検出

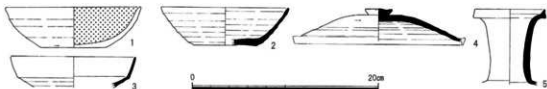
調査状況：17号及び18号住居跡、10号溝跡ほか、多くの遺構と重複関係にある。カマドは調査範囲内では確認できなかったが、他の事例などから北西壁に構築されていると思われる。

出土遺物は土師器坏（1）のほか、須恵器の坏（2）、盤？（3）、蓋（4）、壺（5）がある。

1は内面に黒色処理が施される。3は口縁部の破片のみで判然としないが、その形状から盤の口縁部と考えられる。



第36図 18号住居跡（1：60）



第37図 18号住居跡出土遺物（1：4）

第4節 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡

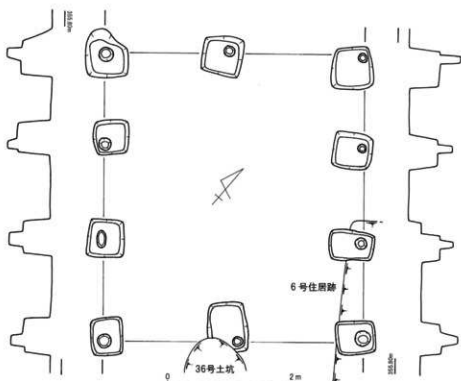
時期：奈良時代（8世紀後半） 規模：桁行3間（4.5m）×梁間2間（4.1m）

平面形：方形 主軸方向：N-40°-W 覆土：黒灰褐色シルト

調査状況：9世紀前半と考えられる6号住居跡に柱穴の一部が破壊されている。柱穴内からの遺物の出土はなかったが、覆土の内容が黒褐色のシルト質土を呈し、8世紀後半代の竪穴住居跡と同様の覆土と見られることから、同時期の遺構を想定する。

柱穴は30～50cmの方形、もしくは長方形を呈する。遺構確認面から40cm前後掘り込まれ、柱痕も良好に確認されている。

桁行間について柱痕間で1.5m、梁間側の柱痕間で2m前後を測る。



第38図 1号掘立柱建物跡 (1:60)

2号掘立柱建物跡

時期：奈良時代（8世紀後半）

規模：桁行3間（4.9m）×梁間2間（4.2m）

平面形：方形

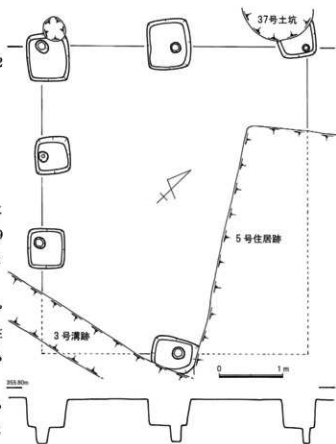
主軸方向：N-46°-W

覆土：黒灰褐色シルト

調査状況：3号住居跡や5号住居跡、3号溝跡などの破壊を受けており、特に南東側の様子が判然とはしないが、第39図に破線で示したとおりの規模となると思われる。

時期も8世紀後半を想定し、傾きがやや違っていることを除けば、1号掘立柱建物跡と同様の内容を呈する遺構である。

柱痕間は、桁行で1.5m～1.7mとばらつきが認められるが、梁間は2m前後と1号掘立柱建物跡と同様である。



第39図 2号掘立柱建物跡 (1:60)

3号掘立柱建物跡

時期：平安時代（9世紀前半?）

規模：桁行2間以上（2.9m以上）×梁間2間以上（3.5m以上）

平面形：方形

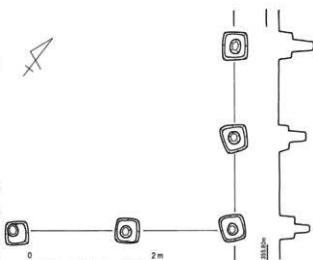
主軸方向：N-37°-W

覆土：暗褐色シルト

調査状況：1号掘立柱建物跡を構成する柱穴を一部破壊している。遺構内部より土器等の遺物の出土がなかったため当該遺構の時期については判断としないが、今回の調査で検出された平安時代（9世紀前半）

の住居跡の覆土内容と類似しているため、9世紀前半代の遺構として捉えておく。

柱裏間は、桁行で1.4m、梁間で1.7m間隔を測る。



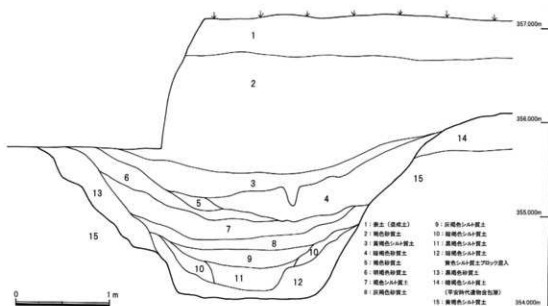
第40図 3号掘立柱建物跡（1：60）

第5節 溝 跡

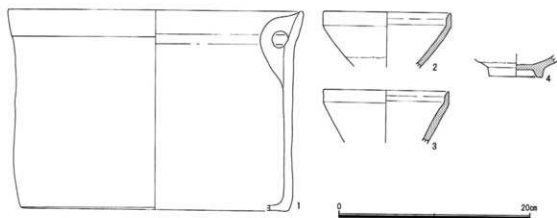
1号溝跡

幅4mほどを測る大型の溝で、平成元年度の調査において確認されている中世居館址の堀跡を想定する遺構と同一の遺構である。よって、調査区内で2箇所に分かれて検出されているが同一の遺構とした。深さは、遺構確認面から1.6mを測り、底面は平坦となる。

遺物は中世を中心として出土しており、内耳鍋（1）と天目茶碗（2～4）がある。このほか、図化はできなかったが、陶磁器片が数点出土している。



第41図 1号溝跡断面図（1：40）



第42図 1号溝跡出土遺物 (1:4)

2号溝跡

暗褐色系の粗砂を覆土とする遺構で調査区の南端で検出された。幅1.8m、深さ50cmほどを測り、調査区西端から6mほど東で終息する。内部から中世の遺物が出土している。

3号溝跡

2号溝跡同様、暗灰褐色系粗砂を覆土とする中世の溝跡で、2号溝跡を合わせて地区を分断する区画溝的な役割を持つ溝跡である可能性が高い。

4号溝跡

調査区南端で検出された幅30cm、深さ8cmほどを測る溝跡である。内部から僅かながら平安時代の土器が出土している。

5号溝跡

調査区北西隅で検出された溝跡である。覆土に黄褐色砂質土を持つ遺構で、内部から遺物の出土はなかったが、仁和4年の千曲川洪水砂で埋没した、9世紀後半の遺構を想定する。

6号溝跡

調査区東端で1号溝跡と重複関係にある溝である。暗褐色シルト質土を覆土に持ち、内部から平安時代の遺物が出土している。幅2mを測り、深さは80cmほどを測る。断面はV字状を呈する。

7号溝跡

幅1m、深さ10cm程度の遺構で、内部から弥生時代中期後半の遺物が僅かに出土している。

8号溝跡

7号溝跡同様に弥生時代中期後半の遺物が出土している。幅30cm深さ5cmを測る。

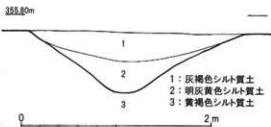
9号溝跡

5号溝跡と同様に黄褐色の砂を覆土とする遺構である。幅1m、深さ5cmを測る。

10号溝跡

東から西に調査区を縦断する溝で、多くの遺構と重複関係にあり、すべての遺構の破壊を受ける。幅は最大で22m、深さは50cm~70cmを測り、断面は浅いV字状を呈している。

弥生時代中期後半の遺物が出土し、層は2つに分けられ、双方から遺物が出土している。

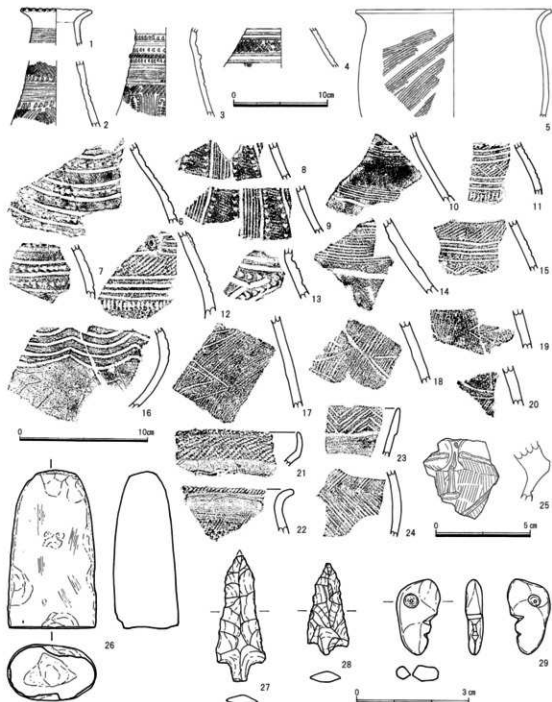


第43図 10号溝跡断面図 (1:40)

出土遺物には、壺（1・4・6～20・25）、甕（5・21～24）、打製石鏃（26・27）、勾玉（28）がある。

1は口縁部が波状となり、端部に縄文を施す。頸部に4本単位の櫛描文を施文している。2は3本の沈線文の上下に刺突文を巡らし、下段の刺突文下には沈線による山形文が施文され、後に縄文を充填する。3は1条の突帯を持ち、沈線文と櫛描文、刺突文を横帯文構成により施文する。胴部上位は懸垂文が施文されている。4は沈線文を主体として施文され、縄文が後に充填される。

17～20は壺の胴部付近の破片と思われる同一個体となる。器面をハケにより調整した後、沈線で三角を基調とした線刻が見られる。内面はヘラケズリがおこなわれている。



第44図 10号溝跡出土遺物（1～5=1:4 6～24・26=1:3 25=1:2 27～29=1:1）

5は口縁部が横ナデにより成形され、5本単位の櫛描文を施文する。21は受け口状口縁を呈し、縄文を施文する。

25は沈線と先端の尖った工具を用いて描かれた髹面付土器と思われる。

26は閃緑岩製と見られ、端部は光沢が現れるほど研磨される。

27は頁岩製の打製石鏃、28は黒曜石製の打製石鏃である。

29はヒスイ製の勾玉で、穿孔は1箇所であらうが両側からである。研磨や加工されたような痕跡は見られないが、腹部に2条の刻みがある。

11号溝跡

1号掘立柱建物跡と2号掘立柱建物跡との間に検出された、幅70cm、深さ20cmほどを測る溝である。東側は6号住居跡に破壊されており、続きと思われる溝跡が周囲に見られないことから、この辺りで終息するものと思われる。

内部からは平安時代の遺物が僅かに出土している程度で、時期の詳細な特定は困難であるが、覆土の内容が8世紀後半に位置付くと思われる遺構と同じ状況を占めている点を考慮し、18号住居跡や1号・2号掘立柱建物跡と同一の時期の遺構として考えている。

12号溝跡

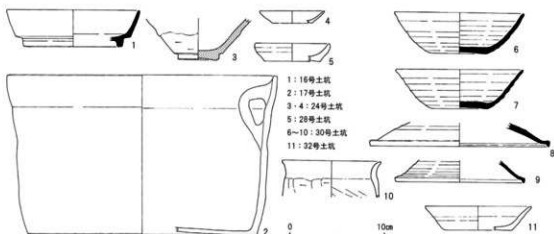
8号住居跡の北側約4mの位置で検出された遺構である。長さ15m、幅10cmを測るもので、遺物の出土はない。

第6節 土坑・ピット

主に直径（長辺）50cm以上の遺構と、遺物の出土する遺構を土坑として扱った。46基確認されている。ピットは、直径50cm以下の、主に砂質土を覆土とし遺物の出土のない遺構を扱った。201基が確認されている。

遺構番号	形態	規模	覆土内容	時代
1号土坑	円形	直径90cm	暗青灰色砂質土	中世
2号土坑	楕円形	80cm×60cm	暗青灰色砂質土	中世
3号土坑	方形	規模不明 深さ40cm	暗褐色シルト質土	平安
4号土坑	長方形	160cm×110cm 深さ10cm	暗青灰色砂質土	中世
5号土坑	円形	直径70cm	暗青灰色砂質土	中世
6号土坑	長方形	110cm×80cm 深さ20cm	暗青灰色砂質土	中世
7号土坑	円形	規模不明 深さ20cm	暗褐色シルト質土	平安
8号土坑	円形	直径80cm	暗青灰色砂質土	中世
9号土坑	長方形	120cm×90cm 深さ15cm	暗青灰色砂質土	中世
10号土坑	円形	直径50cm	暗青灰色砂質土	中世
11号土坑	方形	80cm×80cm 深さ10cm	暗青灰色砂質土	中世
12号土坑	楕円形	130cm×80cm 深さ20cm	暗褐色シルト質土	平安
13号土坑	円形	直径130cm	暗青灰色砂質土	中世
14号土坑	円形	直径80cm	暗青灰色砂質土	中世

遺構番号	形態	規模	覆土内容	時代
15号土坑	長方形	160cm×100cm 深さ30cm	暗青灰色砂質土	中世
16号土坑	楕円形	150cm× - 深さ30cm	暗褐色シルト質土	平安
17号土坑	円形	直径100cm	暗青灰色砂質土	中世
18号土坑	円形	直径80cm	暗青灰色砂質土	中世
19号土坑	円形	直径130cm	暗青灰色砂質土	中世
20号土坑	円形	直径60cm	暗青灰色砂質土	中世
21号土坑	不正円形	100cm×70cm 深さ20cm	暗青灰色砂質土	中世
22号土坑	円形	直径80cm	暗青灰色砂質土	中世
23号土坑	長方形	160cm×100cm 深さ15cm	暗青灰色砂質土	中世
24号土坑	円形	直径150cm	黒褐色粘質土	中世
25号土坑	長方形	310cm×110cm 深さ40cm	黒褐色シルト質土	中世
26号土坑	円形	直径90cm	暗青灰色砂質土	中世
27号土坑	円形	直径140cm	暗青灰色砂質土	中世
28号土坑	円形	直径90cm	黒褐色砂質土	中世
29号土坑	円形	直径100cm	暗青灰色砂質土	中世
30号土坑	楕円形	130cm× - 深さ25cm	暗褐色シルト質土	平安
31号土坑	円形	直径100cm	暗青灰色砂質土	中世
32号土坑	円形	直径100cm	暗青灰色砂質土	中世
33号土坑	円形	直径120cm	暗青灰色砂質土	中世
34号土坑	方形	規模不明 深さ50cm	黒褐色シルト質土	中世
35号土坑	円形	直径80cm	黄褐色粘質土	中世
36号土坑	円形	直径90cm	暗青灰色砂質土	中世
37号土坑	円形	直径100cm	暗青灰色砂質土	中世
38号土坑	円形	直径130cm	暗青灰色砂質土	中世
39号土坑	円形	直径100cm	暗青灰色砂質土	中世
40号土坑	円形	直径150cm	暗青灰色砂質土	中世
41号土坑	円形	直径200cm	黒褐色砂質土	中世
42号土坑	円形	直径100cm	暗青灰色砂質土	中世
43号土坑	方形	70cm×60cm 深さ5cm	黒褐色砂質土	中世
44号土坑	長方形	80cm×40cm 深さ5cm	黒褐色砂質土	中世
45号土坑	円形	直径60cm 深さ80cm	暗褐色シルト質土	平安
46号土坑	円形	直径50cm 深さ30cm	暗褐色シルト質土	平安



第45図 各土坑出土遺物(1:4)

1は16号土坑から出土したもので、須恵器の坏である。

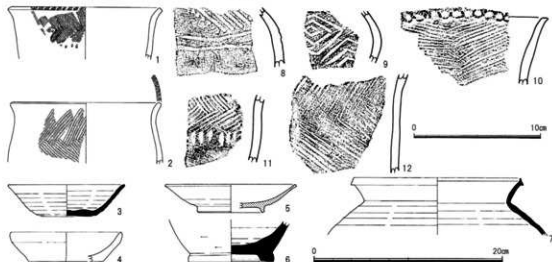
2は17号土坑からの出土で、内部に2ヶ1対の耳を持つ、所謂内耳鍋である。外面の全体にスガが付着している。

3・4は24号土坑で3は天目茶碗、4は小型のカワラケである。

5はカワラケで、器面ロクロナデ。底部は糸切りとなる。28号土坑から出土している。

6～10は30号土坑から出土したもので、須恵器坏(6・7)、須恵器蓋(8・9)、土師器甕(10)がある。6・7はロクロナデによる器面の凹凸が著しく、底部は糸切りとなる。8・9はいずれも痛み部分が欠損している。ロクロナデによる器面の凹凸が著しい。10は小型の甕で外面はヘラケズリが、内面は板ナデにより成形されている。

11は32号土坑から出土したカワラケである。



第46図 遺構外出土遺物(1～7=1:4 8～12=1:3)

1・2は弥生時代中期後半の甕である。いずれも口縁部に縄文が施され、胴部に櫛捺羽状文を施文する。1の胴部には刺突文が廻らされる。3は平安時代の須恵器坏、4は中世のカワラケである。ロクロナデによる器面の凹凸が目立つ。5は灰軸陶器の皿で、ハケにより施軸されている。6は甕の底部破片で、外面にはヘラケズリが見られる。7は須恵器の甕である。10は甕の口縁部破片で、弥生時代中期初頭から前半の資料と思われる。

歴代遺跡群荒井遺跡7 出土遺物観察表①

番号	器種	法量 (cm)		成形・調整・文様		備考
		口縁部	底部	外面	内面	
1号住居跡 (第6図)						
1	甕	21.4		5.6	口縁部：波状・縄文 胴部：9本単位櫛歯波状文 胴部：羽状文	口縁部：ヨコナデ ミガキ
2号住居跡 (第9図)						
1	坏	12.9	5.7	4.5	口クロナデ 底部：糸切り	黒色処理・ミガキ
2	坏	13.2	6.1	5.0	口クロナデ 底部：糸切り	黒色処理・ミガキ
3	坏	13.3	5.6	5.0	口クロナデ 底部：糸切り	黒色処理・ミガキ
4	坏	13.4	6.0	4.0	口クロナデ 底部：糸切り	黒色処理・ミガキ
5	坏	16.6	7.0	5.3	口クロナデ 底部：糸切り	軽いミガキ
6	甕	26.4	26.8	12.0	口クロナデ	板ナデ
3号住居跡 (第11図)						
1	坏	12.4	6.0	4.6	口クロナデ 底部：糸切り	黒色処理・ミガキ
2	坏	13.0	6.3	4.8	口クロナデ 底部：糸切り	黒色処理・ミガキ
3	坏	12.0	5.0	4.7	口クロナデ 底部：糸切り	黒色処理・ミガキ
4	坏	12.4	6.0	4.4	口クロナデ 底部：糸切り	黒色処理・ミガキ
5	坏	13.6	6.0	4.8	口クロナデ 底部：糸切り	黒色処理・ミガキ
6	坏	12.4	4.9	4.4	口クロナデ 底部：糸切り	口クロナデ
7	甕	28.8	31.8	13.6	口クロナデ ヘラケズリ	口クロナデ
8	壺		15.7	15.9	口クロナデ 底部：糸切り→高台	口クロナデ
4号住居跡 (第13図)						
1	坏	14.0	7.0	3.7	口クロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	黒色処理・ミガキ
2	坏	13.8	6.0	4.9	口クロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	黒色処理・ミガキ
3	坏	15.0		4.5	口クロナデ	黒色処理・ミガキ
4	坏	14.4		3.8	口クロナデ	黒色処理・ミガキ
5	皿	12.3	6.2	2.0	黒色処理・ミガキ 底部：糸切り→高台 ミガキなし	黒色処理・ミガキ
6	坏	14.4	7.2	3.8	口クロナデ 底部：糸切り	口クロナデ

厩代遺跡群荒井遺跡7 出土遺物観察表②

番号	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
	器種	口縁部	胴部	底部	器高	
7	環	136		5.5	39	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
8	環	130		60	37	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
9	環	202	224		99	ロクロナデ ヘラケズリ ロクロナデ
10	蓋	110	120		57	ロクロナデ
5号住居跡 (第14図)						
1	環	146		5.4	54	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り 黒色処理・ミガキ
2	環	118		50	28	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り 黒色処理・ミガキ
3	環	126		50	34	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り 黒色処理・ミガキ
4	環	130			40	ロクロナデ 墨書「全」 ロクロナデ
5	環	146			50	ロクロナデ 墨書「庄」 黒色処理・ミガキ
6	碗	104		6.6	48	ミガキ 底部：回転ヘラ切り→高台 黒色処理・ミガキ
7	環	122		5.5	34	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
8	環	132		60	36	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
9	環	136		5.7	41	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
10	環	138		5.7	38	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
11	環	132		5.7	42	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
12	環	132		70	37	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
13	環	130		6.5	38	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
14	環	120		5.3	36	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
15	環	134		70	42	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
16	環	122		5.5	35	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
17	環	134		60	41	ロクロナデ 底部：糸切り ロクロナデ
18	蓋	168	178		135	ロクロナデ ヘラケズリ ロクロナデ
19	蓋	147			61	ロクロナデ ロクロナデ
20	蓋	128	133		5.5	太いカキメ？ ロクロナデ

歴代遺跡調査井通跡了 出土遺物観察表③

番 号	器種	法		量 (cm)		成形・調整・文様		備考
		口縁部	胴部	底部	器高	外面	内面	
21	甕	21.8	23.0		13.3	ロクロナデ	ロクロナデ カキメ	
22	甕	22.2			6.2	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	
6号住居跡 (第16図)								
1	坏	14.5		5.5	5.4	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	黒色処理・ミガキ	
2	坏	12.6		5.1	3.3	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	黒色処理・ミガキ	
3	坏	14.2		7.8	5.3	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り	黒色処理・ミガキ	
4	皿	11.4		6.0	1.6	ロクロナデ→ミガキ	黒色処理・ミガキ	
5	坏	13.6		6.3	4.2	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	
6	甕	19.0			8.0	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	
7	甕	22.2			8.5	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ カキメ	
7号住居跡 (第18図)								
1	坏	15.8			5.1	ロクロナデ ヘラケズリ	黒色処理・ミガキ	
2	坏	12.3		5.5	3.4	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	
3	坏	13.4		6.3	3.3	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	
4	坏	12.0		5.9	3.8	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	
5	坏	13.0		5.9	3.9	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	
6	坏	12.5		7.0	3.3	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	
7	坏	14.0		10.0	3.4	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り→高台	ロクロナデ	
8	坏	13.0		9.1	3.4	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り→高台	ロクロナデ	
9	壺	13.4			2.6	ロクロナデ ヘラケズリ	黒色処理・ミガキ	
10	壺	4.2	8.5	5.1	11.1	ロクロナデ 底部：糸切り→高台	ロクロナデ	
11	甕	20.4			10.0	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ	
12	甕	23.9			8.4	ロクロナデ	ロクロナデ カキメ	
13	甕	22.0			7.4	ロクロナデ	ロクロナデ	

屋代遺跡群壳井遺跡7 出土遺物観察表④

番号	法量 (cm)			成形・調整・文様		備考	
	器種	口縁部	胴部	器高	外面		内面
8号住居跡 (第19図)							
1	坏	140		62	38	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	黒色処理・ミガキ
2	坏	120		59	32	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
3	坏	122			23	ロクロナデ 墨書「上大」?	ロクロナデ
4	坏	130		82	41	ロクロナデ 底部：糸切り→高台	ロクロナデ
5	壺	104			134	ロクロナデ 自然軸付着	ロクロナデ 口縁部：自然軸付着
6	甕	238			60	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ
9号住居跡 (第21図)							
1	坏	138		59	39	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
2	甕	128			42	ロクロナデ	ロクロナデ
11号住居跡 (第25図)							
1	坏	163		76	51	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	黒色処理・ミガキ
2	坏	132		60	33	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
3	甕	250			100	ロクロナデ	ロクロナデ
4	甕	230			90	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ
5	甕	227			61	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ
12号住居跡 (第27図)							
1	坏	136		76	35	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ミガキ
2	坏	130		64	37	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	黒色処理・ミガキ
3	坏	128		55	38	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
4	坏	122		60	37	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
5	坏	126		64	37	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
6	坏	120		84	36	ロクロナデ 底部：糸切り→高台	ロクロナデ
7	壺	120			47	ロクロナデ	ロクロナデ 自然軸付着
8	壺				139	タタキ 自然軸付着	ナデ

歴代遺跡群発掘調査了 出土遺物観察表⑤

番号	器種	法 量 (cm)			成 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
		口縁部	胴部	底部	器高	外 面	
9	碗	15.4		9.0	6.2	ロクロナデ 底部：糸切り→高台	ロクロナデ
10	蓋	14.0			2.9	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ
11	甕	14.4			5.7	ロクロナデ	瓶ナデ
12	甕	11.0	13.4		9.7	ヘラケズリ	ナデ
13	甕	20.8			8.1	ナデ→ヘラケズリ	ナデ
14	甕	20.6			7.0	ロクロナデ ヘラケズリ	ナデ
14号住居跡 (第29図)							
1	坏	13.4		9.9	3.7	ロクロナデ 底部：回転ヘラ切り→高台	ロクロナデ
2	蓋	11.6			4.7	ロクロナデ 自然軸付着	ロクロナデ
15号住居跡 (第31図)							
1	坏	13.2			4.0	ロクロナデ	ミガキ
2	坏	15.9		7.8	4.0	ロクロナデ 底部：手持ちヘラケズリ	ミガキ
3	甕		28.8		30.8	タタキ	ナデ
16号住居跡 (第33図)							
1	坏	12.6		5.8	4.2	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
2	坏	16.0			6.1	ロクロナデ	ロクロナデ
3	蓋	16.4			3.5	ロクロナデ ヘラケズリ	ロクロナデ
17号住居跡 (第35図)							
1	坏	11.9		5.8	3.2	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
2	坏	13.0		8.0	3.3	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
3	坏	12.8		5.4	3.7	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
4	坏	12.2		5.8	4.0	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
5	坏	13.0		5.2	3.2	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
6	坏	12.0		5.4	3.2	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ
7	坏	12.8		5.8	3.7	ロクロナデ 底部：糸切り 焼成後に線刻	ロクロナデ

屋代遺跡群荒井遺跡7 出土遺物観察表⑥

番号	器種	法量 (cm)			外形・調整・文様		内面	備考
		口縁部	胴部	底部	器高	外面		
8	甕	200	208		173	ナデ	ハラケズリ	ナデ
9	甕	212	218		212	ナデ	ハラケズリ	ナデ
10	甕	240	256		251	ロクロナデ	ハラケズリ	ナデ カキメ→ハケ
11	甕	248	262		22.5	ロクロナデ	ハラケズリ	ナデ カキメ→ハケ
18号住居跡 (第37図)								
1	坏	142		70	44	ロクロナデ	底部：手持ちハラケズリ	黒色処理・ミガキ
2	坏	136		66	40	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ
3	甕	130			33	ロクロナデ		ロクロナデ
4	甕				34	ロクロナデ	ハラケズリ	ロクロナデ
5	甕	75			80	ロクロナデ		ロクロナデ
1号溝跡 (第42図)								
1	竈	30.8		280	210	ナデ		ナデ
2	碗	132			58	ロクロナデ	施軸	ロクロナデ 施軸
3	碗	130			55	ロクロナデ	施軸	ロクロナデ 施軸
4	碗			5.6	24	ロクロナデ	施軸	ロクロナデ 施軸
10号溝跡 (第44図)								
1	壺	72			39	口縁部：漆抹→縄文 頸部：4本単位櫛描文		口縁部：横ナデ
2	壺				94	沈線文 櫛描文 縄文 懸垂文 刺突文 突帯1条		ナデ
3	壺				69	沈線文 刺突文 縄文		ナデ
4	壺				42	沈線文 斜線文 縄文		ナデ
5	甕	20.4		202	11.4	5本単位櫛描文		横ナデ
16号土坑 (第45図)								
1	坏	139		103	39	ロクロナデ		ロクロナデ
17号土坑 (第45図)								
1	竈	28.4		242	168	ナデ	ナス付着	ナデ
2	竈							内耳竈

歴代遺跡群発掘調査 出土遺物観察表⑦

番号	器種	法		量 (cm)		成形・調整・文様		内面	備考
		口縁部	胴部	底部	器高	外面	内面		
24号土坑 (第45図)									
3	碗				4.0	ロクロナデ	ヘラケズリ 縁軸	ロクロナデ	天目茶碗
4	杯	6.8		4.3	1.3	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	カワラケ
28号土坑 (第45図)									
5	杯	7.8		5.9	1.9	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	カワラケ
30号土坑 (第45図)									
6	杯	13.4		6.0	4.3	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
7	杯	13.2		5.8	4.2	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
8	蓋	18.6			2.5	ロクロナデ		ロクロナデ	
9	蓋	13.4			2.3	ロクロナデ		ロクロナデ	
10	甕	10.2			3.8	ナデ	ヘラケズリ	ナデ 板ナデ	
32号土坑 (第45図)									
11	杯	11.0		7.0	2.5	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	カワラケ
遺構外 (第46図)									
1	甕	15.8	10.2		5.5	口縁端部：縄文	胴部：6本単位櫛溝羽状文 刺突文	ミガキ	
2	甕	15.4	16.4		6.5	口縁端部：縄文	胴部：5本単位櫛溝羽状文	ミガキ	
3	杯	12.4		5.4	3.4	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	
4	杯	11.6		7.8	3.2	ロクロナデ	底部：糸切り	ロクロナデ	カワラケ
5	皿	13.8		6.7	3.0	ロクロナデ	ハケによる縁軸	ロクロナデ	ハケによる縁軸
6	壺			8.8	4.6	ロクロナデ	ヘラケズリ	ロクロナデ	灰輪陶器
7	甕	17.6			6.1	ロクロナデ		ロクロナデ	

第4章 まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡18棟（弥生2・奈良3・平安13）、掘立柱建物跡3棟（奈良2・平安1）、溝跡12基（弥生3・奈良1・平安4・中世4）、土坑46基（平安7・中世39）、ピット201基（時期不明）を検出した。

ここでは、検出された各時代の遺構を、周辺の調査事例なども交えながら概観し、総括する。

1 弥生時代

弥生時代は中期後半の「栗林式期」の遺構となる。1号住居跡と10号住居跡はいずれも円形を呈し、出土遺物の内容からしてほぼ同時期の遺構と捉えて差し支えない。

今回の調査区では、弥生時代の遺構は少数の検出にとどまった。荒井遺跡内でも北側に集中する傾向があり、城ノ内遺跡を中心とした一帯に展開するようである。

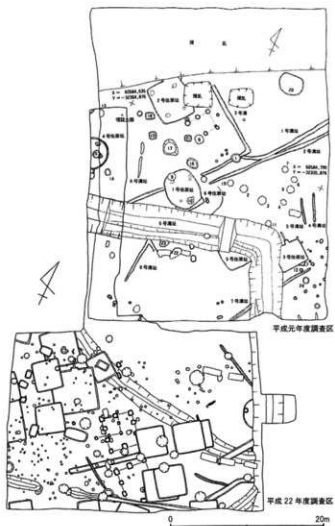
城ノ内遺跡や荒井遺跡では中期後半を中心に、古くは中期初頭から中期前半の遺物も確認されており、住居跡のみならず墓塚と考えられるような遺構の検出例もある。また、断面がV字を呈した囲郭溝を想定する遺構の存在など、断片的ではあるものの、隣接する城ノ内遺跡を含め小規模ながらある程度まとまった集落の展開が予想される。

調査区を横断するように検出された10号溝跡は、幅2m前後、深さは50cm～70cmとなる。

層位的な遺物の出土状況を把握できなかったため判然としなが、出土遺物に若干の時間差が認められることから、長期にわたり存続していた可能性がある。ただ、先述したような囲郭溝と考えられる遺構とは形状的に全く違うものであり、その用途についてははっきりしない。

第44図17～20に示した壺の胴部と思われる土器の外面上、三角形を基調とする、沈線で描かれた線刻が見られる。それぞれが小破片であるため全体の様子がつかめないが、絵画土器である可能性が高い。

また、第44図25は先端の鋭い工具で描かれた鏨面付土器と考えられるもの



第47図 平成元年調査区と本調査区（1：500）

である。

髷面付土器は、屋代遺跡群域ノ内遺跡や屋代清水遺跡などで出土例があるが、いずれも弥生時代中期初頭から前半に位置付くものとされている。今回出土した髷面付土器は弥生時代中期後半の遺構より出土しているため、その位置付けが今後注意される。

10号溝跡から出土した勾玉(第44図29)は、長さ2cm、幅は最大で1cm、最大4mmの厚さを持つ小さなヒスイ製の勾玉である。7号住居跡と8号住居跡、それに10号溝跡の重複関係を確認するために設けたトレンチ内から弥生時代の土器とともに出土したもので、出土地点などから10号溝跡の遺物として扱った。

1箇所穿孔と腹部に2条の刻みをおこなっている以外は、全体に研磨や加工の痕跡は認められず、ほぼ原石に近い状態のままで製品としている。

2 奈良・平安時代

古代集落は屋代遺跡群全体に展開しており、規模の大小はあるにせよ8世紀から11世紀まではほぼ途切れることなく確認することができる。

9世紀の第4四半期、仁和4(888)年に起こった千曲川洪水による大規模災害は善光寺平に甚大な被害をもたらした。この災害により集落や農耕地のほとんどは濁流にのみ込まれたことであろう。洪水以降の集落の主体は被害を免れた山際を中心とした地域に限られ、その後、屋代遺跡群内で水路などを開削し、居住域として集落が築かれ定着し始めるのは10世紀後半から11世紀にかけてとなる。

今回の調査で検出された奈良・平安時代の遺構の多くは、黒灰褐色もしくは暗褐色のシルト質土を覆土に持ち、出土遺物の様相から8世紀から9世紀が主体となっている。仁和4年の洪水によってもたらされた砂(以後、「仁和洪水砂」とする。)の堅穴住居内への流入は、2号住居跡と3号住居跡以外は認められないため、洪水発生時にはほとんどの堅穴住居が嚙絶状態であったことがうかがえる。

各堅穴住居跡からの出土遺物と覆土の様相から、4時期に区分することができた。

今回検出された堅穴住居跡で最も古い時期に属するとみられるのは、14号住居跡・16号住居跡・18号住居跡で、8世紀後半をあてる。いずれの住居跡も出土遺物が少ないため不鮮明な部分があるが、黒灰褐色シルト質土を覆土に持つ住居跡で、調査区の西側に集中する傾向がある。このほか1号掘立柱建物跡と2号掘立柱建物跡、11号溝跡も覆土内からこの時期にあてることができよう。

11号溝跡は、この2種の掘立柱建物跡の間を通る溝であり、そのあり方から掘立柱建物跡との関係も注意される。

次いで8世紀末から9世紀初頭にかけてとみられる5号住居跡・8号住居跡・12号住居跡である。覆土は暗褐色シルト質土を呈する。

12号住居跡は一辺5.9mを測る住居で、4m前後を測る他の住居跡と比較して群を抜いて大型である。カマドも張り出し構造になるなど、他の住居には見られない構造となっている点、集落の中心的な位置に相当する住居となる可能性もある。

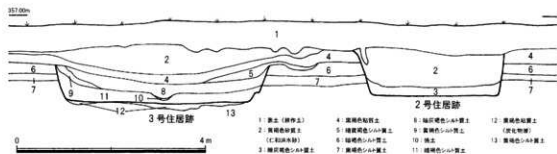
続いて9世紀前半と考えられる堅穴住居跡は、3号住居跡・4号住居跡・6号住居跡・7号住居跡・9号住居跡・11号住居跡・13号住居跡・15号住居跡・17号住居跡で9棟を数える。

3号掘立柱建物跡のほか、4号溝跡や6号溝跡、12号土坑・16号土坑・30号土坑もこの時期と考えられ、暗褐色シルト質土を呈す。

最後は9世紀後半となる2号住居跡である。5号溝跡と9号溝跡もこの時期となる。仁和洪水砂を覆土にもち、今回検出された平安時代の遺構の中では最も新しい遺構となる。

第48図に2号住居跡と3号住居跡2棟の土層断面図を示した。調査区の南壁断面である。

2号住居跡は大きく2層に分層でき、仁和洪水砂層（第2層）と床面の間に別の堆積土が認められる。これに対し、3号住居跡は上部の窪地に僅かに第2層が堆積する。また、第4層を切り込んで構築される2号住居跡と、第4層が廃絶住居内に流れ込んでいる3号住居跡とは、明らかに時間差が生じていることを如実に表している。



第48図 2号住居跡及び3号住居跡の土層断面（1：80）

カマドは、検出された竪穴住居跡16棟の内、13棟に存在が確認された。遺構検出時に煙道が確認できた住居跡が大半であったため、カマドの位置の特定は比較的容易であったが、そのほとんどは住居廃絶時に破壊を受けたと見られ、火床となる焼土の検出される部分と、炭化物や、カマドを破壊した際に飛散したと見られる焼土が周辺に分布している状況が確認されたのみである。カマドの構造を残したものは礫を用いて構築された2号住居跡と17号住居跡のみであった。

竪穴住居跡はある一定の法則に基づいた構築がなされている。

まず、規模と形態であるが、概ね4m前後の方形を呈している。次に、カマドの方向と位置については、北西壁に構築されるものと北東壁に構築されるものとに区別されるが、いずれも中央付近もしくはやや右寄り配されるという特徴がある。方向は、同時期においてもそれぞれ違った方向への構築がなされていることから、時期による変化ということではなく、北西か北東のいずれかへ向けることがある程度決められていたものと考えられる。

このことは、荒井遺跡だけでなく、城内遺跡や松ヶ崎遺跡などで検出されている同時期の住居跡にも普遍的に見られるもので、竪穴住居構築に係る規範が存在していたものと考えられる。

柱穴は、すべての住居跡で検出されていない。調査期間の制限や調査時期の問題等もあり、掘り方の調査をおこなった住居跡が少なかったことから確認することができなかった。

平安時代の竪穴住居跡は、10号溝跡（弥生時代）を境に北側では確認されておらず、平成元年度に実施した発掘調査区でも平安時代の竪穴住居跡（3号住居跡）が1棟検出されたのみである。最も近い7号住居跡や8号住居跡からでも22mほど離れており、広い空白地帯が存在している。

掘立柱建物跡は、調査区の中央付近で方形の柱穴が規則的に並んでいる場所が、遺構検出作業当初から確認でき、柱穴の規模や覆土の様相などから、複数棟の掘立柱建物跡が存在することが判明していた。結果、3棟の掘立柱建物跡を確認することができたが、柱痕を伴う柱穴が他にも存在していることから、別の建物跡もしくは欄列などが存在していた可能性も考えられる。

3 中世以降

中世、あるいは近世については、想定される当時の生活面が現地表から浅いため、後の耕作や土地改良などで破壊されてしまっている例がほとんどと思われる。今回の調査において近世を示す遺構・遺物は確認されず、中世においても、余程深く掘り込まれた遺構でない限り検出は難しいものとなる。

隣接する城ノ内遺跡は、字名を基に名づけられた遺跡名で、その名から城館に関連する施設が存在が当該地帯に想定されている。実際に、方形に区画された地割を古い地図や写真などから観察することができ、また発掘調査においても方形区画されていると見られる大規模な溝跡がいくつも確認できている。

過去の調査において、この溝跡は16世紀代の遺構として捉えられており、その規模や形状から中世居館址の堀跡と想定されている。

今回の調査で中世とみられる遺構は、幅4m、深さ1.6mを測る大型溝跡（1号溝跡）のほか、直径1m前後の円形土坑や長方形の土坑が検出されている。

大型の溝跡に関しては、松代電子細工場建設地点（以後、松代電子地点とする。）、市道松ヶ崎線道路改良地点（以後、松ヶ崎地点とする。）、㈱アクティオ工場建設地点（以後、アクティオ地点とする。）の、それぞれで検出された遺構と同一となるもので、居館址の堀跡と考えられている。松代電子地点と松ヶ崎地点で屈曲部が確認されており、アクティオ地点で西側の堀跡が調査されていることから、居館址の規模は内法で約60m四方を測るものと想定されている。ただ、松代電子地点の屈曲部は僅かに鈍角となり、北側の堀が僅かに膨らむような形状を示すため、単なる方形区画ではなく歪な形態を呈したり、突出部や榍形状の出入口を設けていたりすることも十分に考えられる。

内部からは内耳鍋片やカワラケ、陶磁器などが出土し、その様相から概ね16世紀代の遺構として捉えることができそうである。

円形土坑は、遺構確認面からの深さが2m以上を測るもので、円柱状に掘られているその形状から井戸跡と考えている。ただ、安全上の問題から底面までの調査は実施できておらず、様相が不明確なため当該遺構を積極的に井戸跡とする根拠はない。いずれも、内部には暗青灰色や黒褐色の砂質土が充填しており、稀に黄褐色の粘質土が混ざり込むものも確認されている。

長方形を呈する土坑は6基検出され、円形土坑同様の砂質土を覆土とするものが多い。6号土坑と15号土坑以外は東西方向に長辺をもち、当初その形状から堀跡を想定して調査をおこなったが、内部からは骨片や銭貨など、墓を連想させるような遺物の出土はない。

この、中世に比定されると考えられる砂質土は、仁和洪水砂が流入した2号住居跡の覆土ととてもよく似ている。比較すると砂の粒子がやや粗く、色調も暗青灰色や黒褐色を示すため、主に黄褐色を呈する仁和洪水砂とは区別できるものの、仁和洪水砂にも粒子や色調に差異があり、同じ砂質土であるがために遺物が出土しなかった場合に時代比定が困難となることがある。

2号溝跡や3号溝跡など調査区壁に断面観察のできる遺構も存在するが、上部を耕作により攪乱されてしまい、層序として把握できなくなっていることも時代比定が困難となっている要因の一つともいえる。

現状では、内部から出土する遺物の様相や遺構の形態、覆土である砂質土の類似性などで時代比定をおこなっているが、将来的には土層序と検出遺構の整合性による時代（時期）区分ができれば、この問題も解決されよう。

調査区のほぼ全域で直径10cm～50cmのピットが検出されている。平面形はほとんどが円形であるが、中には楕円形や方形を呈するものもある。遺物の出土が皆無なため明確な時代比定ができなかったことから時期不明遺構として扱っているが、すべて砂質土を覆土としており、井戸跡と考えられる円形土坑や溝跡で観察された砂質土と同じものであることから、中世の遺構である可能性が高い。

これらピットは調査区の南西側に集中し、欄列や掘立柱建物跡などのように規則的な並びになることはない。深さも3cm程度から50cmを超えるものまで様々で、その用途については不明であるが、中世遺構として認識できるのであれば、居館址との関連を想定するものである。

今回の発掘調査は1月～2月という厳冬期での作業となり、日数的な余裕もなかったことから綿密な調査ができたとは言い難い。

日々の発掘作業においても、除雪、除氷・排水作業に始まり、調査面も凍結しては解けの繰り返しで効率良く調査を進めることができなかったが、限られた時間の中で、また、過酷な労働条件の中で発掘作業に従事いただいた皆様には心より感謝申し上げます次第である。

本調査遂行に際して、事業主体者である長野電子工業㈱ 市川和成代表取締役社長をはじめ、小宮山久総務部長並びに大須賀真環境保安部長、(有)エムケー建築企画 鎌倉政代表取締役の各氏には、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力を賜り、また、鹿島・飯島建設共同企業体 長谷川浩司所長並びに黒岩昌也工事課長、(有)河東工業 秋本勇専務取締役の各氏には、重機の手配や安全管理、日程調整等でご支援・ご尽力を頂戴した。

本調査に係わったすべての方々には御礼申し上げ、まとめとする。

参考文献

- 岡田正彦 1970「長野県更埴市屋代大塚遺跡調査報告」『信濃 第22巻第4号』
更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会 1987「屋代遺跡群 馬口遺跡Ⅱ」
更埴市教育委員会 1990「平成元年度 更埴市埋蔵文化財調査報告書」
更埴市教育委員会 2000「屋代遺跡群」
長野県埋蔵文化財センター 1998「更埴条里遺跡・屋代遺跡群」
長野県埋蔵文化財センター 2000「更埴条里遺跡・屋代遺跡群」古代2・中世・近世編
長野県埋蔵文化財センター 2000「更埴条里遺跡・屋代遺跡群」総論編
千曲市教育委員会 2008「屋代遺跡群 城ノ内遺跡10・荒井遺跡6」
長野県教育委員会編 1968「地下に発見された更埴市条里遺構の研究」



1号住居跡



2号住居跡



2号住居跡カマダ検出状況



3号住居跡断面



4号・5号住居跡



4号住居跡・カマダ検出状況



6号住居跡



7号・8号住居跡



7号住居跡カマド検出状況



7号住居跡遺物出土状況



4号～8号住居跡検出状況



10号住居跡



11号住居跡



11号住居跡カマド検出状況



12号住居跡



12号住居跡カマド検出状況



13号住居跡



14号住居跡



15号住居跡



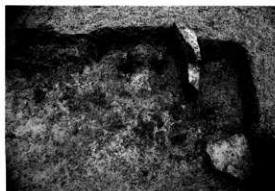
16号住居跡



17号・18号住居跡



17号住居跡カマド検出状況



17号住居跡カマド完掘状況



1号掘立柱建物跡



2号掘立柱建物跡



1号・2号掘立柱建物跡



1号溝跡



1号溝跡断面



2号溝跡



11号溝跡



調査風景



調査区全景(東より)

報告書抄録

ふりがな	やしろいせきぐん あらいいせき 7							
書名	屋代遺跡群 荒井遺跡7							
副書名	長野電子工業㈱工場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	寺島孝典							
編集機関	千曲市教育委員会生涯学習文化課文化財係							
所在地	〒389-0892 長野県千曲市大字戸倉2388番地 TEL 026-275-0004							
発行年月日	2012年2月29日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
屋代遺跡群 荒井遺跡	長野県千曲市大 字屋代字荒井 1200番地ほか	20218	31-5	36° 32' 54"	138° 08' 08"	20110118 \n20110228	950㎡	工場建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
屋代遺跡群 荒井遺跡	集落跡	弥生時代 奈良時代 平安時代 中世	竪穴住居跡 18棟 掘立柱建物跡 3棟 溝跡 12基 土坑 46基 ピット 201基	土器・陶器 石器・玉類		弥生時代と奈良・平安時代の集落跡及び、中世居館址の掘跡を調査		

屋代遺跡群 荒井遺跡7

発行日 平成24年2月29日
 発行 千曲市教育委員会
 〒389-0892 長野県千曲市大字戸倉2388番地
 電話 (026) 275-0004
 印刷 信毎書籍印刷株式会社
 〒381-0037 長野県長野市西和田一丁目30番3号
 電話 (026) 243-2105
